

7. 上福田の結婚

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 最上, 聖子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5005

7. 上福田の結婚

最上 聖子

- I. はじめに
- II. 加賀市における伝統的な結婚の儀礼
- III. 上福田の結婚の事例
- IV. 変化
- V. おわりに

I. はじめに

今回の調査では様々な話を聞いたが、昔の結婚の話を聞いていると、私が知っているような現在の結婚とはずいぶん違って、行われた儀式の名前も耳慣れないものが多く、新鮮で興味をそそられた。しかし上福田でもそのような結婚式が行われることは次第に少なくなり、今では全国に見られるような一般的な結婚式が行われているようである。

上福田の伝統的な結婚式は、いつごろから、どのように変化していったのだろうか。そしてそれに対する上福田の人々の意識はどのようなものか、考えていきたい。

II. 加賀市における伝統的な結婚の儀礼

加賀市の伝統的な結婚はどのようなものだったのか。また、その中で上福田の人々はどのような儀礼を行っていたのだろうか。文献『加賀市史 通史下巻』（1979年）と今回の調査から知り得たことを記述しておく。本節での以下の記述は主に『加賀市史 通史下巻』によるが、「上福田では」と限定的に述べている部分については、私が調査で住民の方々に聞いた話にもとづいている。

○ 結納

結納は挙式の日取りが決定した後、日柄のよい日を選んで行われる。古く一般的には、「シメ酒」と言われており、二升の酒とスルメ・酒にサカナダイを包む地域、「タモトザケ」といって二升の酒

を持っていく地域、「シメ酒帯」といって、丸帯に祝酒を添える地域、現金に酒肴をそえる地域など、様々あるようだが、上福田では「タモツザケ」または「イッショザケ」と呼ぶのが一般的で、1980（昭和55）年頃までは行われていたようだ。夫となる人が妻となる人の家に酒を持って挨拶に行くと、その後から両家の行き来が許されるのだという。羽根布団や加賀友禅などのみやげを贈る人もいた。

○ ムコサマヨバレとオミキヨバレ

結納が済むと、「ムコサマヨバレ」といって、新郎側の親戚・新婦側の親戚、それに村中の女衆を呼んでごちそうする。新郎側では、「オミキヨバレ」といって、婚礼の後に村中の女衆を呼んでいた。

○ 道具運び

嫁入り道具は、タンス・ナガモチ・手ダンス各一揃いとその他簡単な身の回りの品で、前日または当日の朝、親戚の若者によって運搬される。上福田では、一週間前に行ったという人も見られたが、やはり前日か当日の朝に行うのが一般的であった。大聖寺の一部の地域では現在も道具運びの風習が根強く残っているとの証言が得られたが、上福田ではここ数年で道具運びを行ったという夫婦の話は聞かれないようだった。

○ 嫁入式

新郎側からの迎えによって新婦は家を出る。それに際し、神仏に拝して、家族に挨拶をする。「一度家を出たならば再び戻らない」ようにと、玄関先で藁束を2、3束燃やして、「ヤリ火」をする地域もある。こうして新婦は蛇の目傘をさして、仲人・兄弟姉妹・親類の人々に付き添われて婚家に向かう。新婦は婚家のシキイをまたぐ前に、素焼きの盃に、持参した水と新郎側の水を「合わせ水」にして飲む。その盃を落として割る風習が一般的である。地域によっては、新郎側の家の水だけを飲むところ、家に入るときに勝手口から入るところなどもある。また、新婦の親が婚家の玄関先で、スゲ笠を新婦の頭にちよつかぶせてすぐ取り除く、という儀式を行う地域もある。これは、「一度嫁に行ったならば、離婚することがあっても実家には戻らず、スゲ笠をかぶって旅に出よ」という意味をもっているという。上福田では合わせ水を入れる盃を「カワラケ」と呼び、合わせ水を飲んでカワラケを割ることを「カワラケをする」と言う。

このようにして家に入った新婦が神仏に参り、三三九度と親子盃等の盃事が行われる。上福田では青年団による獅子舞が行われる場合もあり、3年ほど前にも行ったことがあったそうだ。

○ 披露宴

披露宴は2日に分けて行うのが一般的であった。1日目に出席するのは新婦及び両家の近親者で、新郎は出席しないのが普通である。2日目には村人や友人、遠い親戚などが呼ばれる。宴は酒が底なしに出され、出席者が酔いつぶれるまで延々と続く。上福田でも1960（昭和35）年頃までは2日に渡って行う場合が多かったようだ。

III. 上福田の結婚の事例

今回の調査では、様々な年代の夫婦から話を聞いた。上福田の結婚の具体的な事例を紹介する。

① Aさん(82歳男性)、Bさん(78歳女性)の場合

AB夫妻が結婚したのは1945(昭和20)年頃のことだ。戦中の簡素令が敷かれる直前で、「今のうちにお金を使ってしまえ!」と、ずいぶん盛大に結婚式が執り行われたらしい。AB夫妻は当時の様子をよく覚えていて、式の流れを詳細に語ってくれた。

結婚式の当日、Bさんは自分の家で花嫁衣裳に着替え、神仏に挨拶をした。家族にお別れの言葉を述べた後、迎えに来た相手方の娘とAさんの家の前まで行き、ここで合わせ水を飲んでカワラケを割ったそうだ。Bさんは合わせ水を飲んだ後、「もう二度といません」と言ってカワラケを地面に落として割ったのだという。この言葉には、もう新婦が生家に戻ることがないように、つまり、離婚することがないように、という願いが込められているとBさんは語った。

この後BさんはAさんの家に入って白無垢に着替え、神仏にお参りをした。このお参りはBさん一人でしたそうだ。次に床の間へ移ってAさんとBさんは三三九度を行った。床には粗薦が敷かれ、松明や蠟燭に火が灯されていたという。三三九度が済むとAさんは退室し、ここで初めてAさんの両親が入室してBさんと親子盃を交わした。こうして式が終了した後、披露宴、道具披露が行われた。

② Cさん(72歳男性)、Dさん(68歳女性)の場合

CD夫妻が結婚したのは1957(昭和32)年頃で、式は2日に渡ってCさん宅で行われた。1日目は身内だけを招いて行ったそうだ。昼前に内掛けを着たDさんがCさんの親戚の女の子に連れられて家に来る。カワラケを割って家の中に入ったのだが、その際AB夫妻の場合のような誓いの言葉などは言わなかったという。夕方から仏式の結婚式が始まり、夜に披露宴をしたそうだ。「これが長いよ!ダラダラと遅くまで～」とDさんは言う。

2日目は友人や遠い親戚を招いたのだそうだが、なんと昼の式が行われない以外は1日目とまったく同じことをしたのだという。「ダラダラとね」と笑うDさんであった。

③ Eさん(69歳男性) Fさん(64歳女性)の場合

EF夫妻が結婚したのは1961(昭和36)年のことであった。式が行われたのはEさんの家で、仏前での式だった。Fさんがカワラケを割って家に入ると、青年団による獅子舞が舞われた。

そのあと神仏にお参りをして両家の挨拶が済むと、披露宴が始まる。CD夫妻同様、宴会は2日に分けて行われた。また、息子(43歳)の結婚式は1994(平成6)年に結婚式場で行われたそうだ。

④ Gさん(60歳男性) Hさん(57歳女性)の場合

GH 夫妻は 1969 (昭和 44) 年に結婚した。式は G さんの家で、三三九度と親子盃だけの簡単なものだったそうだ。しかし、親子盃については「やったようなやらなかったような、よく覚えていない」と H さんは言う。式のあとの披露宴は料理屋で行われたそうだ。

⑤ I さん (39 歳男性)、J さん (33 歳女性) の場合

J さんの母親の K さん (56 歳) によると、IJ 夫妻の結婚式は神社で行われたそうだ。I さんは婿養子であるということで、カワラケは I さんが割ったのかと尋ねたところ、「そうだったような気もするけど、よく覚えてないわ」との返事だった。上福田は婿養子が多いと聞いたので、いろいろなお宅で同じ質問を試してみたのだが、はっきりと知っている人はいないようだった。

結婚後にも様々な儀礼があったそうだ。まず結婚式の翌日に、近所の家に赤飯を配ってあいさつ回りをする。その 2~3 日後、新婦は実家に 1 週間里帰りをするのがしきたりで、AB 夫妻は里帰りの最終日に新郎とその両親を招く「ウチアゲ」という儀式も行ったという。また、出産は新婦の里でするのが一般的で、生後 7 日目には新郎とその両親を新婦の実家に招く「オヒチャヨバレ/ヒッチャヨバレ」が行われる。そして生後 30 日目になると、生まれた子供は新婦の家から新郎の家に渡される。これを「孫渡し」というそうだ。

IV. 変化

上福田の結婚はどのように変化していったのだろうか。まず場所の変化が挙げられる。1970 (昭和 45) 年頃までは、新郎の家で結婚式を行うのが一般的であった。それが 1980 年代からは神社や結婚式場など、家以外の場所で行われることが多くなったようだ。日数にも変化があった。披露宴を 2 日に分けて行っていたのは 1960 (昭和 35) 年頃までに結婚した夫婦で、それより後に結婚した夫婦の話では、披露宴は 1 日だけであった。結婚後の里帰りやウチアゲ、出産に関わる儀礼のオヒチャヨバレや孫渡しなどが行われていたのも 1960 (昭和 35) 年頃までだったようだ。カワラケに関しては 1980 年代にも行われていたが、カワラケを割るときに「もう二度といません」というような言葉を述べていたのは 1940 年代までであったようだ。日数減ったり、儀式が省かれたり、上福田の結婚にまつわる儀礼は年代が進むにつれ、徐々に簡略化されていったようである。

話を聞いていて印象的だったのは、年齢が若い人ほど、自分の結婚式やその前後の儀式についての記憶が曖昧だということだ。若くて、行った儀式も少ないほうがよく覚えていそうなものなのに、実際は高齢の夫婦のほうが儀式について細かく記憶しているようだった。これはどうしてだろうか。1969 (昭和 44) 年に結婚した H さんは次のように語っている。

「あのころは本人よりも周りが騒いで動いていたから、自分たちは何がなんだか分からないうち

に事が進んでいた。今思えば何も考えてなかったかもしれない」。

対照的に、1961（昭和36）年に結婚したFさんはこう語る。

「昔は結婚式が盛大だったぶん、その後の里帰りやヒッチョヨバレなども、大切なこととして行われていたの。最近は何でも簡単になってよくない。離婚だって簡単にしてしまう人が増えたでしょう」。

このように、年代によって結婚やそれに関わる儀式に対する意識の違いが見られる。Fさんが結婚した頃までは、結婚するということがより重要な事柄であり、人生の一大事であったのが、Hさんが結婚した頃になると、重要なことというより、当たり前のこと、というように、結婚の捉え方が変化していったと推測される。それが儀式の簡略化や、若い方が自分の結婚についての記憶が曖昧になるということに繋がったのではないだろうか。また、昔のほうが、結婚＝新婦が新郎の「家」に入る、という意識が強く、そのため「孫渡し」という言葉からも窺えるように相手方の「家」子供を、つまり「新郎の親の孫」を産むということが非常に重要なことであった。そしてそのような意識が薄れていくにつれ、結婚後の儀礼、とく出産にまつわる儀礼は行われなくなっていったものと考えられる。

V. おわりに

2004（平成16）年の9月、私は友人の結婚式に出席した。式は教会、披露宴は駅前のホテルで、両家の親族、新郎新婦の友人や会社の人々を招いて行われた。「これから2人で楽しい家庭を築いていきます。見守っていてください」という両親への言葉を思い出すと、やはり今は、結婚はすでにある「家」に入ることであるというより、新たな家庭をつくる、その出発点であるという意識が強いのだなと改めて感じた。

現在はインターネットや結婚情報誌などが広く普及し、地域の特色が色濃く表れるような結婚式を行う夫婦は少なく、全国的に同じような式が行われているようだ。しかしそのかわり、というわけではないだろうが、新郎新婦は自分たちの発想やアイデアを生かし、趣向を凝らした個性的な結婚式や披露宴を行っている。まさに手作りの思い出である。Hさんが言っていたような、結婚する当人の知らないうちに事が進んでいた時代から、またさらに変化したと言える。

結婚に対する人々の意識は今後も変化していくだろうが、晩婚化や少子化、経済事情などの複雑な背景があり、価値観が多様になっていく現在、その変化の原因を一概に述べる事は難しい。しかし、今回の上福田での調査のように、結婚式の形から推測できることは数多くあるのではないだろうか。この経験を生かし、今後も日本の結婚の変化について注目していこうと思う。